でんぽのめがね

あきつ松風通信 第189号
イースター礼拝説教 2023. 4. 9.
臼井 勲

「疑いを打ち破り、越えて」（ヨハネ 20：11-29）

「12弟子の1人で、デドモと呼ばれたトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちは彼に"私たちは主を見た"と言った。しかし、トマスは彼らに"私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません"と言った。8日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、"平安があなたがたの上にあるように"と言われた。それからトマスに言われた。"あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者でなく、信じる者になりなさい。"トマスはイエスに答えた。"私の主、私の神よ。"イエスは彼に言われた。"あなたは、わたしを見たから信じたのですか、見ないで信じる人たちは幸いです。」

今日は主イエスが復活された、イースター・サンデーです。クリスマスの掛け声は「メリー・クリスマス」ですが、イースターは「ハッピー・イースター」と言います。「メリー」は、楽しい、面白いという意味で、未信者もクリスマスは喜ぶことが出来ます。しかし復活（イースター）節は、これを喜ぶのは、イエス・キリストが復活されたことを信じる者だけが喜ぶことが出来るのであって、結婚式の当事者は、「メリー」ではなく、「ハッピー」であるはずです。だから「ハッピー・イースター」はキリスト者だけの特権なのです。　さて、主イエスが十字架上で死なれたとき、弟子たちや信徒は落胆と失望と、疑惑だけが残りました。「落ち振れて、袖に波のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる」という和歌があります。主イエスの十字架の下に誰が残っていたでしょう。ヨハネだけを除いて、男の弟子たちは、散り散りに逃げかくれて、女の弟子たちだけが残り、主の葬りを致しました。主の体に香油を塗るために墓を訪れたのも婦人たちだけでした。私たちの教会も婦人方が多い、皆さん大いに胸を張って下さい。聖書こそ婦人の力を認める第1の書です。恐れと疑惑にかられたのは男の弟子たちだけでなく、主を十字架につけた祭司長、パリサイ人たちも、「弟子たちがイエスの遺体を盗み、復活したと言いふらすのではないかと疑い恐れて墓の入口に巨大な石を置き、封印して、不眠の歩哨（ふしょう）を立てました。後にローマの千人隊長はパウロを護るために470名の兵隊を動かしましたがピラトは主イエスの遺体を守るためにローマ兵を動かました。　賛美歌にあるように、「番し続けし兵の努力むなしかりし、あゝわが主」「封印かたき門破り、出でたまえり、あゝわが主」「よみより帰り、死と悪魔に勝ちし、君こそ勝利の主、君こそまことの主なれ」であります。誰が予想し得たでしょう。墓は外からではなく内側から破られたことを。　悲しみの中でさえ、主への愛と忠誠を貫き通した女性たちの勇気をほめないわけには行きません。　復活した主イエスに最初に会う栄誉を得たのは、ペテロでもヨハネでもなく、マグダラのマリアでした。彼女は重度の悪霊付きから主イエスによって解放されて以来、主を深く愛していました。彼女は、主の遺体がなくなっている事の悲嘆の余り、墓の中にいた天使にも気付かず、涙にくもった眼は後に立っておられた主イエスの姿も見えず、声をかけられてもそれは墓のあったオリーブ園の主人としてしか認識しませんでした。主が普段話していたアラム語で「マリアム」（マリアよ）と呼ばれ初めて主イエスと分り、同じアラム語で「ラボニ」（先生）と答えたのでした。彼女は嬉しさの余り主にすがりつきました。主は静かに「情に流されずに、使命に生きるように促されました。他の弟子たちにこの「よき報せ」を告げるために。　そして、恐れ隠れ引きこもっていた弟子たちに、復活の主はその日曜日の夕方、姿を顕わされた。「シャローム」と言われた。今日も使われる挨拶のことばだが、この「平安あれ！」と二度繰り返し言われたのは、地上の平和と、心の平安こそ、復活の

主が私たちに与えてくださる最大の恩恵であるからである。そして彼らの疑惑を払拭するように、私たちの罪の代価を支払われた証拠でもある手の釘跡と、罪の赦しときよめの徴である「血と水」が槍で突かれ流れ出た脇腹の傷跡をお示しになった。それは弟子たちの疑惑を打ち破り、新しい命に生かすためであり、さらに彼らに息を吹きかけ、「聖霊を受けよ」と言われ、彼らの自発的決断で新しい使命に生きるすすめであった。創世記の初めに父なる神が人間を創造され、霊の息を吹きかけ、生きたものになって以来の、子なる神の再創造の息吹きでもあった。でもそこにトマスは居なかった。彼は、他の弟子たちが「主に会った」という証しを信じなかった。彼は、「主の死の徴である手の釘跡と、槍で突れた脇腹の傷跡を見、手で触ってみなければ決して信じない」と言った。僕が中・高時代の恩師、堀川勇牧師は、よくこのトマスの事を話された。先生は「彼は哲学者エンゲルのような実証主義者である」と言った。ある人は「懐疑主義者」、「科学的思考者」などと言った。尾山令仁師によれば、「彼が真の科学的思考者、実証主義者であれば、主に会ったマグダラのマリアに会って確めたり、弟子たちに根掘り葉ほり質問するはずではないか。それをしていないのは、頑固にこれの想念に捉われた「応着者的頑固者」の代表タイプではないか」と言われる。彼には、「思いこみ一念型」と思われるフシもある。主イエスが、主のよき友、ベタニヤのラザロが重病に倒れたという報せを聞いても腰を上げず、そのうちラザロは死にます。主が「ラザロは死んだのだ」と言われると、トマスは、何を勘ちがいしたのか、「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか」と言い放ちます。彼は「方向音痴的熱血漢」と言えなくもない面があり、悪く言えば、一種の「偏屈者」だったかも知れません。しかし、そんな彼をもこよなく愛しておられたのが主イエスでありました。彼の良さは、信じられないからと言って、不貞くされて孤立化せず、仲間割れせず皆と一緒に居たと言うことです。主はこのトマスのために、彼の居る所に再び現れて下さいました。主は彼の疑問をみな聴いて下さっていました。そして、彼の疑問その(1)「私はその手に釘跡を見、私の指を釘の所に差し入れ」に対し、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい」と言い、疑問その(2)「また私の手を脇に差し入れてみなければ」に対し、「手を伸して、わたしの脇に差し入れなさい」と言われた。そして、彼が(3)「決して信じない」に対し、主は「信じない者でなく、信じる者になりなさい」と言われた。トマスは、主に会った時、すでに信じたのである。主の慈愛あふれることばを聞けば、彼のスネた偏屈感情も吹きとんで、ただ、「ああ、わが主よ、わが神よ」と云う感激のことばが噴出したのであった。僕は、上野の国立美術館に常設展示されている絵「トマス」を行く度に、よく見るのである。小さな絵で、額の禿げ上った初老の男が俯きかげんに、じっと目を据えて槍の白く光る穂先を見つめている。これはトマスが主の復活の報を聞いても信じられず、疑念に懊悩している姿をよく表わしているように思われる。主の復活はキリスト教の根本であり、この事のためにパウロの伝道があった。「疑う」と言うことは、旧約聖書も、新約聖書も決して退けてはいない。やみくもに付和雷同して信じたり、洗脳的に信ずることを禁じている。全員賛成の決定を嫌い、反対者や疑惑者のいる多数決を重ずる。パウロの伝道でベレヤの教会は、説教者の話しが本当か聖書をよく調べたことをパウロは評価した。復活の物語にトマスの物語があるのは当然なことでもあるのだ。誰か、トマスが疑念を打ち破られ、晴れ晴れとした笑顔で、後に遥か遠く福音の未開地インドにまで宣教に行ったという、そして伝説では「達磨さん」のモデルにもなったと云うトマスの姿を描く人はない者だろうか。「あなたはわたしを見て信じたが、見ないで信じる者は幸いである」これは現代の私たちに語られた主のことばである。これは今日の私たちが「自我像」として描く絵にしたいものである。